

9 Mayer–Vietoris 完全列 (2)

コチェイン複体の短完全列 $0 \rightarrow \mathcal{A} \xrightarrow{f} \mathcal{B} \xrightarrow{g} \mathcal{C} \rightarrow 0$ が誘導する長完全列

$$\begin{array}{ccccccc}
 \dots & \longrightarrow & H^{k-1}(\mathcal{B}) & \xrightarrow{g_{k-1}^\#} & H^{k-1}(\mathcal{C}) & & \\
 & & & & \downarrow \delta_{k-1} & & \\
 & \longleftarrow & H^k(\mathcal{A}) & \xrightarrow{f_k^\#} & H^k(\mathcal{B}) & \xrightarrow{g_k^\#} & H^k(\mathcal{C}) \\
 & & & & \downarrow \delta_k & & \\
 & \longleftarrow & H^{k+1}(\mathcal{A}) & \xrightarrow{f_{k+1}^\#} & H^{k+1}(\mathcal{B}) & \longrightarrow & \dots
 \end{array}$$

を考える。 $H^k(\mathcal{A})$ における完全性は次のような **diagram chasing** によって示される。(コチェイン複体 \mathcal{A} を構成するベクトル空間を A^k (ただし $k \in \mathbb{Z}$) と書き, 線形写像 $A^k \rightarrow A^{k+1}$ は $d_{\mathcal{A}}^{(k)}$ などと書かずに単に d で表す。 \mathcal{B}, \mathcal{C} についても同様とする。)

($\text{im } \delta_{k-1} \subset \ker f_k^\#$ の証明) 任意に $[\alpha] \in \text{im } \delta_{k-1}$ をとる。 im の定義により $[\alpha] = \delta_{k-1}([\gamma])$ と表せる。 ただし γ は $d\gamma = 0$ をみたすような C^{k-1} のある元である。

ここで δ_{k-1} の定義を思い出す。 $g_{k-1}(\beta) = \gamma$ となる $\beta \in B^{k-1}$ をとり, さらに $f_k(\alpha') = d\beta$ をみたす $\alpha' \in A^k$ をとる。 自動的に $d\alpha' = 0$ であることに注意して, $\delta_{k-1}([\gamma]) = [\alpha']$ と定めるのだった。 前段落最後の式と合わせて $[\alpha] = [\alpha']$ である。

したがって

$$f_k^\#([\alpha]) = f_k^\#([\alpha']) = [f_k(\alpha')] = [d\beta] = 0.$$

すなわち $[\alpha] \in \ker f_k^\#$ である。

($\ker f_k^\# \subset \text{im } \delta_{k-1}$ の証明) 任意に $[\alpha] \in \ker f_k^\#$ をとる。 すると $f_k^\#([\alpha]) = 0$ なのだが, これは $[f_k(\alpha)] = 0$ を意味する。 つまり $f_k(\alpha) = d\beta$ をみたす $\beta \in B^{k-1}$ が存在する。

そのような β を一つとって, $\gamma = g_{k-1}(\beta)$ とおく。 すると以下で確かめるように $\delta_{k-1}([\gamma]) = [\alpha]$ が成り立ち, ゆえに $[\alpha] \in \text{im } \delta_{k-1}$ という結論がえられる。

そもそも $[\gamma]$ が定義されるためには $d\gamma = 0$ でなければならないのだが, そのことは

$$d\gamma = d(g_{k-1}(\beta)) = g_k(d\beta) = g_k(f_k(\alpha)) = 0$$

によりわかる。 $\delta_{k-1}([\gamma]) = [\alpha]$ であることは δ_{k-1} の定義から直ちに従う。

49. 上記の長完全列の $H^k(\mathcal{B})$ における完全性を示せ。
50. 上記の長完全列の $H^k(\mathcal{C})$ における完全性を示せ。 [ヒント：しばらく考えてわからなければ, L. W. Tu 『トウー 多様体』 (裳華房) 定理 25.6 の後の説明をみよ。]

51. 多様体 M 上の微分形式 ω について, その台 $\text{supp } \omega$ とは $\{p \in M \mid \omega_p \neq 0\}$ の M における閉包のことである.

コンパクトな台をもつ微分 k 形式全部からなるベクトル空間を $\Omega_c^k(M)$ で表す. 外微分作用素 d は $\Omega_c^k(M)$ を $\Omega_c^{k+1}(M)$ の中に写す*. コチェイン複体

$$\dots \xrightarrow{d} \Omega_c^{k-1}(M) \xrightarrow{d} \Omega_c^k(M) \xrightarrow{d} \Omega_c^{k+1}(M) \xrightarrow{d} \dots$$

のコホモロジー群を $H_{\text{dR},c}^k(M)$ と書くことにしよう. これを M のコンパクト台をもつ **de Rham コホモロジー群** という (M がコンパクトなら普通の $H_{\text{dR}}^k(M)$ と同じもの).

さて, M の開集合 W, \tilde{W} のあいだに包含関係 $W \subset \tilde{W}$ があるとき, $\omega \in \Omega_c(W)$ は, W の外の各点における値を 0 と定めることで $\tilde{\omega} \in \Omega_c(\tilde{W})$ へと「ゼロ拡張」できる. この「ゼロ拡張」を与える線形写像を $ze_W^{\tilde{W}}: \Omega_c(W) \rightarrow \Omega_c(\tilde{W})$ で表す. そのとき,

$$\begin{aligned} f_k: \Omega_c^k(U \cap V) &\rightarrow \Omega_c^k(U) \oplus \Omega_c^k(V), & \alpha &\mapsto (ze_{U \cap V}^U(\alpha), -ze_{U \cap V}^V(\alpha)), \\ g_k: \Omega_c^k(U) \oplus \Omega_c^k(V) &\rightarrow \Omega_c^k(M), & (\beta_1, \beta_2) &\mapsto ze_U^M(\beta_1) + ze_V^M(\beta_2) \end{aligned}$$

とおけば,

$$\begin{array}{ccccccc} & & \vdots & & \vdots & & \vdots \\ & & \downarrow d & & \downarrow d & & \downarrow d \\ 0 & \longrightarrow & \Omega_c^k(U \cap V) & \xrightarrow{f_k} & \Omega_c^k(U) \oplus \Omega_c^k(V) & \xrightarrow{g_k} & \Omega_c^k(M) \longrightarrow 0 \\ & & \downarrow d & & \downarrow d & & \downarrow d \\ 0 & \longrightarrow & \Omega_c^{k+1}(U \cap V) & \xrightarrow{f_{k+1}} & \Omega_c^{k+1}(U) \oplus \Omega_c^{k+1}(V) & \xrightarrow{g_{k+1}} & \Omega_c^{k+1}(M) \longrightarrow 0 \\ & & \downarrow d & & \downarrow d & & \downarrow d \\ & & \vdots & & \vdots & & \vdots \end{array}$$

がコチェイン複体の短完全列となることを示せ.

問題 51 でえられた短完全列に定理 9.1 を適用して $H_{\text{dR},c}^k$ に関する Mayer-Vietoris 完全列を得る. これは具体的な計算に役立つほか, たとえば「Poincaré 双対性」の証明にも用いられる[†].

次の問題では, Poincaré 双対性の特別な場合にあたる「連結かつコンパクトな n 次元多様体 M について, さらに M が向きづけ可能ならば $H_{\text{dR}}^n(M) \cong \mathbb{R}$ である」という事実を使う (向きづけ可能性の定義は次回与える)[‡]. 3次元実射影空間 $\mathbb{R}P^3$ は向きづけ可能なので, $H_{\text{dR}}^3(\mathbb{R}P^3) \cong \mathbb{R}$ である.

52. $H_{\text{dR}}^k(\mathbb{R}P^3)$ を $0 \leq k \leq 3$ について求めよ. ただし $H_{\text{dR}}^3(\mathbb{R}P^3) \cong \mathbb{R}$ は既知としてよい. [ヒント: 問題 48 と同様の開集合 U, V に関する Mayer-Vietoris 完全列を用いる.]

*なぜなら $\text{supp } d\omega \subset \text{supp } \omega$ だから. この包含関係は, $(\text{supp } \omega)^c$ が $\{p \in M \mid p \text{ のある開近傍において } \omega = 0\}$ に等しいことに注意すればわかる.

[†]R. Bott & L. W. Tu, *Differential Forms in Algebraic Topology*, Springer の第 5 節をみよ.

[‡]同じ前提のもとで, M が向きづけ可能でなければ $H_{\text{dR}}^n(M) = 0$.